

## 東博本『後三年合戦絵詞』の制作時期

——序文の二層性を糸口として——

野 中 哲 照

### 一 はじめに

東京国立博物館所蔵の『後三年合戦絵詞』（国指定重要文化財）は、もと全六巻存在したらしい（『実隆公記』永正三年（一五〇六）十一月十二日条）が、現在はその第四・五・六巻の三巻分のみが伝存している。そしてこれには、巻子の体裁の序文も一卷付装されている。

この序文については早くから偽書性が指摘されており（笠榮治（二九六八）、小木曾千代子（二〇〇八））、前稿『後三年記』序文の偽書性（『野中（二〇一三）』）でもこの問題を重点的に取り上げた。そこでは、序文が偽書であることを再確認し、さらにそれが織豊期―近世初期につくられたこと、徳川家康の娘督姫が池田輝政に嫁する際に持参した可能性が高いこと、起草に天海僧正が関与した可能性があることについて述べた。

そのうえで前稿の末尾において、『後三年記』序文は古い層と新しい層から成って」おり、「偽書のなのはその新しい層の部分であるらし」く、「それを丁寧に取り替えると、古い層が見えてきそう

だ」と予告的に述べておいた。現存の序文以前に、原序文を想定する必要があるということである。そのことを、本稿で述べる。

また、この問題は、東博本『後三年合戦絵詞』の真の制作時期の解明にも寄与するものと考えられる。従来は序文の「貞和三年」によつて、東博本絵巻は一三四七年に制作されたものと考えられてきたのだが、その序文に偽書性が認められたことによつて「貞和三年」の根拠を失うことになり、絵巻物本体の制作年代の吟味が白紙に戻っていたのである。原序文の時代性がわかれば、それとセットであつたろう東博本『後三年合戦絵詞』の真の制作時期もより明瞭になるのではないかという目論見である。

キーワード…源恵、玄恵、吾妻鏡、平家物語、本願寺上人親鸞伝絵

## 二 序文のほころび

——原序文を想定すべきこと——

まずこの序文に、漢文体を訓読する際に生じたらしき、いわゆる訓読崩れが含まれていること指摘したい。訓読崩れは、二か所ある。

一か所目は、次の部分である。

後漢の二十八将、其形を凌雲台に写す。

本朝賢聖障子、名士を紫宸殿に図せらる。

前者の「後漢の二十八将」は一般に「雲台二十八将」と呼ばれている故事で、「後漢の光武帝に従って天下平定に功のあった二十八人の將軍のこと」(小尾郊一(一九八六))である。「後漢書」列伝一二を原典とし、日本では「文選」巻五〇「史論下」の「後漢書二十八将伝論」(范蔚宗)で流布していたとみられる。後者の「本朝の賢聖障子」は古代中国の賢聖三三人の姿を日本において描いたもので、内裏紫宸殿の母屋と北廂との境界付近に立てられていた障子である。

「後漢の二十八将、其の形を凌雲台に写す」からすると、その対句の片方である「本朝賢聖障子、名士を紫宸殿に図せらる」は「本朝の賢聖名士、紫宸殿の障子に図せらる」とあるべきではないだろうか。なぜならば、名詞「賢聖名士」とあってこそ人を指す名詞「二十八将」と四字どうしで対を構成しうるからである。

漢文的に書き直すと、

後漢 二十八将、写 其形 凌雲台

⇨国 ⇨人 ⇨堂 ⇨物 ⇨場

本朝 賢聖名士、図 障子 紫宸殿

とあるべきだろう。六字句の対が並んでおり、本格的な四六駢儷体の隔句対であることがわかる。主語・述語・目的語などに対応している(厳密には脚韻への配慮不足や「其形」「障子」の格のずれがあるが、それは当時の日本人の限界だろう)。つまり、この序文に先立つ漢文語序の原序文があつて、それを訓読する際にミスを犯したかのような文脈なのである(おそらく「後漢の二十八将、其の形を写せし凌雲台。本朝の賢聖名士、障子に図せし紫宸殿」と訓読すべきだったのだろう)。

ただし、「賢聖障子」という熟語がすでにあるので、「賢聖名士」は不自然だという異論が出るかもしれない。「本朝文粹」(康平年間(一〇五八―一〇六四)成立)巻六(天徳二年(九五八)一月十一日)に、

而紫宸殿之皇居。七廻書賢聖之障子。大嘗会之宝祚。両度豎画図之。

とあるのが、古い例だろう。覚一本「平家物語」巻一「二代后」の、彼紫宸殿の皇居には、聖賢の障子を立てられたり。…(中略)…尾張守小野道風が、七廻賢聖の障子とかけるも、ことはりとぞ見えし。

は、「本朝文粹」の影響を受けたものである可能性が高い。また、「古今著聞集」(建長六年(一二五四)成立)の三八四話には、

南殿の賢聖障子は、寛平の御時始めてか、れけるなり。

とある。「後三年合戦絵詞」の序文が制作されるころには、「賢聖障

子」という話は一般化していた表現だったろう。

しかし、「賢聖障子」の四字熟語が早くから一般化していたとしても、それを解体してでも右のように整合性のある対句を構成するものなのではないだろうか。もともと典語というものは、出典の表現そのままを引用するものではなく、むしろ多少ずらして用いる（出典を匂わせる程度に離す）のが一般的でさえある。右の句は、「後漢」と「本朝」、「凌雲台」と「紫宸殿」、「写」と「図」などから、対句を構成することを指向した表現であることは明らかである。対句を指向しながら、「二十八将」と「賢聖障子」の非対応が出てくるのは、いかにも不自然だろう。おそらく原序文においては「賢聖名士」とあったものが、後世の序文改作者（天海僧正か）が原作の意図を汲み取れないまま一般的に流布している表現に吸い寄せられるように「賢聖障子」と訓読してしまったのではないか。

訓読崩れの二か所目は、次の部分である。

後素精微のうるはしき丹青の花、春常にとゞまり、

能筆絶妙の姿、金石の銘、古にはづべからず。

「後素」は絵のこと、「能筆」は詞書の字体についてのこと、両方合わせて絵巻物の美麗さを讃えようとした対句である。



東京国立博物館蔵「後三年合戦絵詞」序文より

Image: TMN Image Archives

ここにも、不自然なところが二点ある。一点目は、「うるはしき」である。対句が構成されていることを考慮すると、「姿」に対応すべく「麗」（うるはしき）という名詞であるべきだろう（東博本、「さ」ではなく明らかに「き」と読める。画像参照）。二点目は、「春常にとゞまり」である。「古にはづべからず」を漢文体に戻すと「古不可恥」（四字）となるが、「春常にとゞまり」は「春常留」（三字）となつて一字分の脱字を想定しうる。ただしこれについては、「春常留也」「春常留矣」「春常留哉」「春常留焉」などと助辞を想定すれば、脱字はないことになる。そこを差し引いても「うるはしき」の不自然さは解消しないので、ここには訓読崩れがあるとみてよいだろう。

このように、漢文訓読の際に起こるようなミスがこの序文に含まれているとすれば、この序文は、ひとつ前の姿、（漢文体）を想定すべき文章だということになる。

### 三 序文の二層性

そこで、序文そのものを丁寧に分析しなければならない。序文の内容は、次のように、「序」（合戦の概要）（絵巻物制作の経緯）（跋）の四段落から成っているとみることができ（日本絵巻大成本の複製によって新たに翻刻した）。

〔序〕

朝家に文武の二道あり。互に政理を扶く。山門に顕密の両宗あり。をの／＼護持を致す。是聖代明時の洪業より出て、神明仏陀の余化にあらずといふことなし。

〔合戦の概要〕

しかるに、本朝神武天皇五十六代清和天皇の御子貞純親王六代の後胤、伊与守源頼義朝臣の嫡男、陸奥守義家朝臣、八幡殿と号す。堀河院御宇、永保三年に奥州の任に赴く。爰に、みちのくに奥六郡を領せし鎮守府將軍武則が孫、荒河太郎武貞が子、真衡<sup>1</sup>が富有の著、過分の行跡より起りて、一族ながら郎従となれりし秀武、ふかきうらみをふくみて合戦をいたす。其余殃広に及て、つゝに武衡・家衡をせめられしに、大軍<sup>2</sup>ちからをつくし、勇士名をあぐる戦、その数をしらず。此間に、大將軍<sup>3</sup>陸奥守の武徳、威勢、上代にもためしすくなく、漢家にも又稀なり。所謂、雪の中に人をあゝたむる仁心は、陽和の氣膚にふくみ、雲の外に雁を知る智略は、天性の才胸に蓄ふ。或は士卒<sup>4</sup>甲臆の座、計ごとをもて人をはげまし、或は凶徒没落の期、掌をさしてこれをしめす。仍て、寛治五年十一月十四日夜、大敵すでに滅亡して殘党悉く誅に伏す。其後、解状を勅して奏聞、<sup>4</sup>観感尤太し。俗呼て、これを八幡殿の後三年の軍と称す。

〔絵巻物制作の経緯〕

星霜は多くあらたまれども、彼嘉名は朽ることなし。源流広

く施して、今に至りて又弥新なり。古来の美歎、誰か其威徳を仰がざらん。世上の知る処、猶ゆくすゑに伝へ示さん事を思ふ。後漢の二十八将、其形を凌雲台に写す。本朝賢聖障子、名士を紫宸殿に図せらる。故に今、此絵を調へ置かしむる所なり。

就中に清和御代、殊に吾山の仏法を崇さす。其徳好を思ふに、流を斟ては必ず源を尋ぬべきことほりあり。況や又、当時天下の静謐・海内の安全、しかしながら源氏の威光・山王の擁護なり。是等の来由につきて、此画図、東塔南谷の衆議として其功を終ふ。

狂言戯論の端といふことなかれ。兒童幼学のこゝろをすゝめて、讃仰の窓中、時々是を披て永日閑夜の寂寞をなぐさめ、家郷の望の外、より／＼これを翫て嘲風晴月の吟詠にまじへんとなり。後素精微のうるはしき丹青の花、春常にとゞまり、能筆絶妙の姿、金石の銘、古にはづべからず。彼此共に益あり。老少同じく感ぜざらめや。

〔跋〕

于時貞和三年、法印権大僧都玄慧、一谷の衆命に応じて、大網の小序を記すといふことしかり。

この序文には、異質な二本の指向が混在している。その第一は、「合戦の概要」に顕著に見えている。その名のおとし後三年合戦の概要を詞書に拠つてまとめた部分で、詞書の内容と

整合的であれば問題ないのだが、齟齬するところが四か所あり、そこが問題となる。この序文に込められた指向を分析する手がかりになるからである。ただし、その四か所すべてが意図的な操作というわけではない。たとえば、傍線部1の「真衡が富有の奢、過分の行跡」は、『後三年記』の〈4秀武逃亡〉で老齡の吉彦秀武が祝儀の砂金を捧げ持っているのを無視して囲碁を打っていたエピソードに拠ったのだろうが、一方で〈1真衡の威勢〉では「心うるはしくして、ひがことををこなはず。国宣を重くし、朝威をかたじけなく」とも紹介されていて、正確さに欠けるというべきだろう。傍線部3の「士卒甲臆の座、計ごとをもて人をはげまし」も、〈19剛臆の座〉に「將軍の兵ども、心をはげまさむとて、日ごとに剛臆の座をなむ定ける」とあるのに拠れば、兵士たちが自主的に座を設けたのであって、義家が設けたのではない（前稿）。これも、正確さに欠けるというレヴェルの齟齬だろう。

ところが、傍線部4の「其後、解状を勅して奏聞、叡感尤太し」は『後三年記』の内容を明らかに改変する意図をもっているようだ。『後三年記』の〈36官符下されず〉では、「わたくしの敵たるよしきこゆ。官符を給はせば、勸賞をこなはるべし。よいて、官符なるべからざる」よしさだまりぬ」とあるので、朝廷がこのいくさを公戦と認めなかったということであり、「叡感尤太し」とは正反対である。野中（二〇一）で述べたように、後三年合戦が私戦扱いされたことは、中世の武士、ことに源氏にとってはなんとしても克服しなければならぬ心の傷であった。これを〈後三年トラウマ〉

と名付けた。この序文八四五文字の執筆意図は、「叡感尤太し」の五文字を表現ところに核心があったとみて間違いない。いわば、後三年合戦のイメージの捏造（好印象化）を計ったのである。絵巻物の詞書に手を加えることには怖れの心情が働いたのであろうし、また、すでに異本が拡散していたとすれば、絵巻物本編の詞書を書き換えにくかったのもあろう。ゆえに、序文を付装してそれによって読者の読みを誘導しようとしたのではないか。実際にごく最近まで、この絵巻物は八幡太郎義家の事績を讃えたものとして享受されてきたのである。中原康富が文安元年（一四四四）閏六月二十三日に承安本（四巻本）絵巻を鑑賞した際、おそらく原文には書かれていなかったであろう「八幡殿」「官軍」という表現を用いて要約している。六巻本の序文の影響とは断定できないものの、鎌倉武士社会が一、二世紀かけて行ってきた〈後三年トラウマ〉からの脱却が奏効し、鑑賞者たちのまなざしにフィルターをかけさせたものと考えてよい（野中（二〇一四））。それは、長期間にわたって享受者たちが序文の罨にまなまと引つかかっていたということだろう。

そして、傍線部2の「大將軍陸奥守の武徳、威勢、上代にもたれしすくなく、漢家にも又稀なり」も、『後三年記』の内容と一致するとはいえない。『後三年記』の中で義家は一度も弓を引いていないし、刀も抜いていない。（31武衡の処刑）（32武衡の命乞い）（33千任の処刑）でみせた残酷非情さからすると、「威勢」という表現は合わないだろう。むしろこの「威勢」は、義家の残酷非情さを糊塗するために選択された表現ではないかとさえ思われる。そもそ

も、ここに挙げられた内容を『後三年記』と対応させてみると、義家にとつて都合のよい部分しかピックアップされていないことに気づく(前稿)。総じていえば、『合戦の概要』においては、後三年合戦のあらすじを語るように見せかけながら、その実、『後三年記』(『後三年合戦絵詞』詞書)の義家像や合戦像のイメージの悪さを払拭し、読者の読みを肯定的なものへと誘導しようとする指向に支えられているといつてよい。

\* \* \*

第二の指向は、『四角い枠線』で囲んだ三か所(A・B・C)にみえるものである。この中には「山門」「吾山」「山王」「東塔南谷」の語が含まれていて、比叡山を指していることが明らかである。そしてそのことが、比叡山の「法印権大僧都玄慧」すなわち玄恵(慧)を序文作者とすることと結びついている。なかでも、Bの枠のうち、「当時天下の静謐・海内の安全、しかしながら源氏の威光・山王の擁護なり」が、こちらの指向の核心だろう。「天下」「海内」を守っているのは「源氏」とともに「山王」(比叡山)の功力によるものだとする認識が見える。もともと源義家は後三年合戦の中心人物であるわけだから、ここに「山王」をすべりこませている指向のほうがか、いかにも取って付けたようで、後次的である(現存の序文が天海僧正(山王)によって改作され、徳川家康(源氏)に提供されたものである可能性を前稿で指摘した。「源氏」と「山王」で日本国を護持するという世

界観の披歴である)。

一個の人間の中においても、文章の中で二つの主張を述べたいという状況はよくある。つまり、この序文に二本の指向が混在していることそのものは、矛盾だなどと称して問題視するにはあたらない。ところが、「山王」をすべりこませた部分(B)がいかにも接合的である証拠がある。(絵巻物制作の経緯)は、「星霜は多くあらたまれども……(中略)……故に今、此絵を調へ置かしむる所なり」とあって、絵巻物制作の経緯を述べて文章としてはいったん閉じている感がある。ところが、再び、「就中に清和御代……(中略)……是等の来由につきて、此画図、東塔南谷の衆議として其功を終ふ」とあって、絵巻物制作の経緯が二重化している。その後者の部分(B)に「山王の擁護」が出てくるのである。

絵巻物制作について二つの経緯が語られているというわけだが、前者は「八幡殿」の「嘉名」を「ゆくすゑに伝へ示さん」ためであり、後者は「清和」天皇以来「崇」められてきた「吾山」(比叡山)の「山王の擁護」を顕彰するためである。また、前者は表現主体自身の欲求であり、後者は「東塔南谷の衆議」に推されたというものである。

二重化だけではない。この部分の「就中」という接続語は前からの続きが悪く、そのなかでも「とりわけ」の意味で用いられているとはいえない。この枠内にはほかに「況や又」「しかしながら」と接続語が頻出しており、いずれも接続語本来の機能を果たしているとは言えない。このような不自然な接続語の頻用は他の部分には

見られず、この部分の異質性を際立たせている。ここで、「絵巻物制作の経緯」の後者(B)は後次的に挿入されたのではないかという疑念が沸いてくる。

Bの部分を取り除いて、「…故に今、此絵を調べ置かしむる所なり」から直接、「狂言戯論の端といふことなかれ。兒童幼学のころをすゝめて…」と接続させても違和感がないどころか、そのほうが矛盾がなくなる。

文体的にみても、Bの直前は、

星霜は多くあらたまれども、彼嘉名は朽ることなし。

源流広く施して、今に至りて又弥新なり。

や、

後漢の二十八将、其形を凌雲台に写す。

本朝賢聖障子、名士を紫宸殿に図せらる。

というように対句意識を持つ表現が用いられ、一方のBの直後も、讃仰の窓中、時々是を披て永日閑夜の寂寞をなぐさめ、家郷の望の外、より／＼これを翫て嘲風暁月の吟詠にまじへんとなり。

や

後素精微のうるはしき丹青の花、春常にとまり、

能筆絶妙の姿、金石の銘、古にはづべからず。

と対句が用いられていて均質的であるのに対して、四角い枠の中では対句は用いられておらず、先述のように、不自然な接続語を頻用して苦し紛れに飛躍気味の論理展開を行っている。同一人物による

文章とは見えないのである

もし、B「就中に清和御代…(中略)…此画図、東塔南谷の衆議として其功を終ふ」が後次的に増補された部分だとすれば、他の二か所(AとC)も同じく「山王」のつながりで、増補である可能性が出てくる。とくに、末尾の「于時貞和三年、法印権大僧都玄慧」がこの序文の偽書性を際立たせている(笠、小木曾)ことからすると、「山王」関係の三か所(A・B・C)がまとまって増補された可能性が高いとさえいえる。

以上のように、この序文は二層的であり、四角い枠A・B・Cが後に増補された部分で、そこを取り除いた部分が原型であると考えられる。そして、前節の結論と合わせて考えれば、原序文は漢文体であり、それを訓読する際に、A・B・Cを付加したのだろうと推測することができる。ここでの二層性の指摘は、現段階ではまだ十分な証拠をもちえておらず、ひとつの可能性の呈示に留まるものだろう。しかし、第五節での補強によって、より説得力をもちうるものとなるはずである。

#### 四 もとの序文の姿

四角い枠A・B・Cを取り除いた部分は、もともと存在した部分だということになるが、それに加えて、「合戦の概要」冒頭の「しかるに」という接続語を除くと、もとの序文の姿がみえてくる。次のとおりである(先述のように原序文は漢文体であったと考えられるので、

正確に言えば次の文章を漢文体に直し、崩れた対句を正しくしたものが原序文だろう。

本朝神武天皇五十六代清和天皇の御子貞純親王六代の後胤、伊与守源頼義朝臣の嫡男、陸奥守義家朝臣、八幡殿と号す。堀河院御宇、永保三年に奥州の任に赴く。爰に、みちのくに奥六郡を領せし鎮守府將軍武則が孫、荒河太郎武貞が子、真衡が富有の資、過分の行跡より起りて、一族ながら郎従となれりし秀武、ふかきうらみをふくみて合戦をいたす。其余殃広に及て、つゐに武衡・家衡をせめられしに、大軍ちからをつくし、勇士名をあぐる戦、その数をしらず。此間に、大將軍陸奥守の武徳、威勢、上代にもためしすくなく、漢家にも又稀なり。所謂、雪の中に人をあゝ、たむる仁心は、陽和の氣膚にふくみ、雲の外に雁を知る智略は、天性の才胸に蓄ふ。或は士卒甲臆の座、計ごとをもて人をはげまし、或は凶徒没落の期、掌をさしてこれをしめす。仍て、寛治五年十一月十四日夜、大敵すでに滅亡して殘党悉く誅に伏す。其後、解状を勒して奏聞、叙感尤太し。俗呼て、これを八幡殿の後三年の軍と称す。

星霜は多くあらたまれども、彼嘉名は朽ることなし。源流広く施して、今に至りて又弥新なり。古来の美歎、誰か其威徳を仰がざらん。世上の知る處、猶ゆくするに伝へ示さん事を思ふ。後漢の二十八將、其形を凌雲台に写す。本朝賢聖障子、名士を紫宸殿に図せらる。故に今、此絵を調べ置かしむる所なり。

狂言戯論の端といふことなかれ。児童幼学のこゝろをす、め

て、讃仰の窓中、時々是を披て永日閑夜の寂寞をなくさめ、家郷の望の外、より／＼これを翫て嘲風暁月の吟詠にまじへんとなり。後素精微のうるはしき丹青の花、春常にとゞまり、能筆絶妙の姿、金石の銘、古にはづべからず。彼此共に益あり。老少同じく感ぜざらめや。

これが、『後三年合戦絵詞』の原序文の姿ではないだろうか（この末尾に、後述の「源恵法印」による奥書が添えられていた可能性もある）。源義家の事績を称揚する指向で一本化され、矛盾も飛躍もない文章である。

この原序文はおそらく、東博本の六巻本の絵巻物に付装されていたものである。なぜならば、本来、寛治元年に終結したはずの後三年合戦を、東博本絵巻と同じように「寛治五年十一月十四日夜」（二重傍線部）としているからである。紙質も、六巻本の本編（現存は三巻だが）と序文は同じものとされている（宮次男（一九七七））。この原序文は、現存の——誤写を含んだ——東博本本編を見ながら書かれたものとみて、まず間違いない。この原序文——天海僧正が家康に提供した際に増補した部分を取り除いたもの——と現存東博本とはもともとセットで伝来した可能性が高いことである。漢文体で書かれた原序文を訓読しつつ、山王のことを入れ込んだのが、天海僧正だったのではないだろうか。

ということは、この原序文の成立時代がわかれば、それに付随して東博本絵巻物の制作時期も絞れてくるということになる。



## 五 序文の使用語彙の二層性

### ——『吾妻鏡』と非『吾妻鏡』——

前節までに、東博本『後三年合戦絵詞』序文の二層性について指摘した。古層は源義家をとさらに称揚する指向で貫かれているのにたいして、新層は比叡山や天台宗の存在感を押し出そうとする指向を有している。両層の接合の痕跡（つぎはぎ感）の存在についても指摘した。文体的に見ても、古層はもと漢文体であったと推定されるのにたいして、新層はそれを訓読しつつ新たな文脈を入れ込んだきたものと考えられる。ということは、古層と新層とは使用語彙の観点から見ても異質なものであるということが言えるのではないだろうか。逆の見方をすれば、使用語彙の異質性が指摘されれば、現存の序文が二層的事であることのさらなる補強にもなる。

結論を先取りして言う、古層の使用語彙は『吾妻鏡』と重なるが、新層のそれは覚一本『平家物語』などと重なるのである。前者を実務的・武家的とするならば、後者を芸術的・公家的ということができようか。

### 1 五十六代清和天皇 —— 古層の表現（1）

まず、古層の部分に出てくる、「本朝神武天皇五十六代清和天皇の御子貞純親王六代の後胤、伊与守源頼義朝臣の嫡男、陸奥守義家朝臣、八幡殿と号す」に注目する。「神武天皇」「五十六代」「清和

天皇」というキーワードを揃って持つ文脈は、覚一本『平家物語』には存在しない。延慶本『平家物語』にも一例もない。ところが、『吾妻鏡』養和二年（一一八二）二月八日条には、次のような文章がある。

頼朝が遠祖を訪ぬれば、神武天皇初めて日本国豊葦原水穗に臨觴せしめて、五十六代に相当れる清和天皇の第三の孫より、武芸に携りて国家を護り、衛官に居て朝威を耀かす。しかりしより以来、野心を挿む凶徒を征罰する勲功によりて、恵沢身に余り、武勇世に聞へ、和国を無為にして截克く調ふありて、星霜三百余歳に覃ぶところ、保元年中より洛陽に兵乱起る。時の人湯王の化を訪はず、鎮護の誓を存ぜず。

清和源氏のルーツを語る文脈は、たとえば半井本『保元物語』中巻「白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事」に、

清和天皇ノ苗裔ニテ、為朝マデ九代ニ当レリ。六孫王ノ七代、満仲ガ六代ノ後胤、頼義ガ四代ノ孫、八幡太郎義家ガ四男、六条判官為義ガ八男也。

とある。ここには、そもそも神武天皇から語り起こす意識がない。

『太平記』巻一には、

ここに本朝人皇の始め、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇の御宇に、武臣相模守平高時といふ者ありて、上君の徳に違ひ、下臣の礼を失ふ。

とある。ここには「神武天皇」はあるが「後醍醐天皇」に結びつける意識からか「清和天皇」は出ない。『源平盛衰記』巻二七「石橋

合戦の事」には、北条時政が大場景親にたいして頼朝を紹介して、

我が君はこれ清和天皇の第六皇子、貞純親王の御子六孫王より七代の後胤、八幡殿の四代の孫、前右兵衛佐ぞかし。

と言う。ここには「清和天皇」は出ているが、「神武天皇」からの語り起こしがない。同書巻二七「大神宮祭文、東国討手帰洛附天下餓死の事」には、十郎藏人行家が三河国庁で伊勢大神宮に祭文を奉じて、

爰に行家先跡は、昔天<sup>あまつこ</sup>国押し開き給ひて後、清和天皇の王子貞純親王七代の孫、六孫王より下津方<sup>したつかた</sup>、併ら武弓を励まして、専ら朝家を護る。

と言う。ここには神代の昔からの語り起こしはあるが、「神武天皇」も「五十六代」も出てこない。以上のように、当時、為義・義朝・頼朝に至る系譜の説明が画一化されていたわけではないということがわかる。さまざまなヴァリエーションが存在する中で、『後三年合戦絵詞』序文と『吾妻鏡』はまれまれに一致した認識を持ち、使用語彙も共通しているのである。

ついではながら、「武勇」や「星霜」もこの序文に出てくる言葉であり、『後三年合戦絵詞』序文と『吾妻鏡』が言語世界を共有しているといえる。

## 2 富有・過分 —— 古層の表現 (2) ——

次に、古層の部分に出てくる「真衡が富有<sup>ふ</sup>の奢<sup>あ</sup>、過分<sup>あ</sup>の行跡より

起りて」に注目する。覚一本『平家物語』では、「富有」が一例、「過分」が七例あるが、それぞれ別の個所で使用されたものであつて、セットで用いられた例はない。延慶本『平家物語』にも、セットの例はない。ところが『吾妻鏡』には「富有」が二例、「過分」が一三例あつて、そのうち元暦元年(一一八四)十一月二十一日条の一例は、次のようにセットで用いられた例である。

常胤・実平がごときは、清濁を分たざるの武士なり。所領をいはば、また俊兼に及ぶべからず。しかるにおのおの衣服已下、龜品を用ゐて、美麗を好まず。故にその家富有<sup>ふ</sup>の聞え有りて、数輩の郎従を扶持せしめ、勲功を励まんとす。汝、産財の費ゆるところを知らず、はなはだ過分<sup>あ</sup>なりと云々。俊兼述べ申すに所なく、面を垂れて敬嘔す。

源頼朝が、筑後権守俊兼の華美を戒めている場面である。千葉常胤や土肥実平は質素な暮らしをしているので「富有」であるのに対して、俊兼は「過分」であると叱責している。この場合は「富有」が肯定的で「過分」は否定的なので、ある意味では対になっているともいえるので、『後三年合戦絵詞』序文で同類語として並列的に使用されているのは多少のニュアンスのずれがある。しかし、『吾妻鏡』のような使用例が先にあつて、『後三年合戦絵詞』序文が両者の違いをあいまいにして援用することは十分に考えられる。

### 3 余殃 —— 古層の表現 (3) ——

次に、古層の部分に出てくる「秀武、ふかきうらみをふくみて合戦をいたす。其余殃、広に及て、つるに武衡、家衡をせめられしに」に注目する。寛一本『平家物語』には二例の「余殃」があるが、いずれも「積善の余慶」と対になった「積悪の余殃」という熟語的な用法である。一個人の中で時間的に積み重ねた「善」や「悪」のもたらす結果を問題にした文脈である。

しかし、序文の文脈では、秀武が仕掛けたいくさの余波といううな意味で用いられている。

『吾妻鏡』には、この用法が三例も見られる（三例の「余殃」があり、すべて序文と同じ用法）。まず、文治元年（一一八五）十二月二十六日条である。

前中将時実朝臣、予州（義経）に同意して西海に赴くの間、路次においてこれを生虜る。今日、武者所宗親相具して参向するところなり。また左府（経宗）の御書到来す。これ故小松内府（重盛）の末子前土佐守宗実は、幼齡の当初より猶子たり。しかるにかの余殃によつて、断罪あるべきの由風聞す。枉げてこれを申し請けんと欲すと云々。

この「余殃」は北条本を底本とする国史大系本に拠ったもので、寛永版本によれば「余族」とある。平重盛の子宗実が藤原経宗——義経に加担した——の猶子であったので、その余波で処刑されようとしたという文脈である（結果的に助命された）。これは「余族」で

あるべきかもしれない。

次に、元久二年（一二〇五）十一月三日条である。

小澤左近将監信重、綾小路三位（師季）の息女（二歳）を相伴ひて、京都より参着す。すなはち行光をもつて事の由を尼御台所（政子）に啓すと云々。これ母儀は、稲毛三郎入道重成が女、遠州禅室（時政）の御外孫なり。去ぬる六月、重成入道誅せらるるの後、乳母の夫信重、扶持の号ありといへども、なほかの余殃を恐れて隠居するのところ、尼御台所御哀愍あるべきの由、内々仰せらるるの間、参向すと云々。

この年の六月の畠山重忠の乱によつて稲毛重成が謀反（讒言）の疑いによつて誅せられたのだが、重成の娘と綾小路師季の間に生まれた二歳の姫（重成は北条時政の娘を妻としていたので重成との間に生まれた娘が師季に嫁して生まれた姫は時政の曾孫にあたる）の身柄を、乳母である小沢信重が守るべく姫とともに隠居したという文脈で、「かの余殃を恐れて」が出ている。これも、序文と同じく、争乱の余波の意味である。

次に、承久三年（一二二二）十月十二日条である。

また三日夜半、殿下（近衛家実）および右幕下（公経）の亭焼亡す。前殿下（道家）の亭、同時に放火せしむといへども打ち消す。およそ叛逆の余殃、いまだ尽きずと云々。

これは、承久合戦の京方の残党が敗走を続けるなど、戦後処理に手間取っていた時期に近衛家実、西園寺公経、九条道家の邸宅が放火される事件が起きたという文脈で、これも争乱の余波の意味であ

る。

このように、『後三年合戦絵詞』序文の古層で用いられている「余殃」は、覚一本『平家物語』における用法とは異質で、『吾妻鏡』と等質的だとみられるのである。

このような余波の意味の「余殃」は『玉葉』治承四年(一一八〇)十一月一日条などにもみえており(人の悪逆に依り、上皇その余殃に懸らしむるか)、かつてはそのほうが一般的だったということが分かる。

覚一本『平家物語』の「余殃」は二例とも「積悪の余殃」の用法しかないと述べたが、延慶本『平家物語』には四例の「余殃」があり、そのうち三例は覚一本と同じ「積悪ノ余殃」で、残る一例は、「適余殃ヲ免レ給シ人々モ、忽ニ家ヲ出、世ヲ遁レテ」(第二中)とある。これは、治承三年のクーデタの直後の翌四年正月の場面で、後白河院の鳥羽殿幽閉の余波を貴族たちが恐れているという文脈である。つまり、『後三年合戦絵詞』序文や『吾妻鏡』に近い用法が、延慶本にしろうじて一例だけ見えるということである。ということからは、争乱の余波を表現する文脈でもともと用いられることの多かった「余殃」が、漢文の対句的な文飾指向(余慶)→「余殃」に引きずられて、しだいに覚一本『平家物語』にみえるような「積悪の余殃」という固定した用法に限定されていったというプロセスが察せられる。『後三年合戦絵詞』序文の古層にみえる「余殃」は、鎌倉時代的なものといえるのかもしれない。

#### 4 解状を勒す——古層の表現(4)——

次に、古層の部分に出てくる「其後、解状を勒して奏聞、叡感尤太し」に注目する。覚一本『平家物語』には「解状」の語が一例も出てこない。「勒す」という動詞も見いだせない。もちろん『吾妻鏡』には「解状」は二例も出てくるし、「状を勒す」の表現もいくつも見られる。元暦元年(一一八四)十二月一日条に、頼朝の文書が引用されているのだが、その末尾に、「よつて状を勒すること件の如し」(状を勒する)は「勒状」ともとある。文治二年(一一八六)九月二十五日条には同二十一日付の文書が引用されていて、その末尾に、「よつて在状を勒して、言上件の如し」とある。寿永元年(一一八二)五月二十九日条でも、

そもそも去年の冬の比より、関東静かならず、殊に祈請すべきの旨、しきりに綸言を下さるるによつて、おのおの丹誠を凝すのところ、図らざるのほかに、神主・棚宜等朝家を背きて源氏に同意し、かの祈請を致すの由、讒奏出来するの間、度々院宣を下し、真偽を相尋ねらるるによつて、誤らざるの状を勒し、請文を進じをはんぬ。(後略)

覚一本『平家物語』にも多くの文書の引用があるが、そこでは一度も用いられていない「状を勒す」の言い方が、このように『吾妻鏡』には三例見られるのである。そもそも「状を勒す」の意味について、『現代語訳吾妻鏡』を参照してみると、次のようにある。

そこで、この通り文書に記し伝える。(右の引用文の第二)

よってありのままを記して、言上することは以上の通りです。

(右の引用文の第二)

誤ったことはしていないとのことを記して請文を提出しました。(右の引用文の第三)

「勅」が意味している意味内容は、ありのまま正確に記す、ということらしい。序文の「其後、解状を勅して奏聞、叡感尤太し」は合戦のさまを正確に記して帝に奏聞したところ叡感に預かった、という意味だろうから、まさに符合する。

以上のように、『後三年合戦絵詞』序文のうちの古層の部分には、『吾妻鏡』に近い言葉が使用されているらしいのである。これ以外の、「大軍」「勇士」「漢家」「上代」「凶徒」「残党」「叡感」「威徳」などは一般的な表現であり、表現主体の文化圏を限定する材料にはならない。また、「陽和の気膚」「天性の才胸」「後素精微」「能筆絶妙」などは他に類例がなく、この序文の表現主体独特の用語(造語)かもしれない。

\* \*

では、新層であるA・B・Cの部分の使用語彙はどうだろうか。「顕密の両宗」という言い方は、『吾妻鏡』にも覚一本『平家物語』にも見られる一般的な表現である。そのような表現は除いて、『吾妻鏡』に見られず覚一本『平家物語』にのみ見られるような表現が新層の部分に集中していることを指摘したい。

## 5 文武二道 —— 新層の表現(1) ——

まずは、新層の部分に出てくる「朝家に文武の二道あり」に注目する。『平家物語』巻七「願書」の、打倒平家の兵を挙げた木曾義仲が、砺浪山の新八幡に願書を捧げる場面で、右筆の大夫房覚明について「文武二道」と評しているところである。

覚明が体たらく、かちの直垂に黒革威の鎧着て、黒漆の太刀をはき、二十四さいたるくろぼろの矢負ひ、ぬりごめ藤の弓脇にはさみ、甲をば脱ぎたかひもにかけ、えびらより小硯、たふとり出し、木曾殿の御前に畏ッて願書をかく。願書を既に書かんとす。あッばれ文武二道の達者かなとぞ見えたりける。

延慶本『平家物語』でも、ここで「文武二道」が用いられている。延慶本では、そのほかにも第六末の斎院次官親能の言葉の中にも出てくる。ところが意外なことに、『吾妻鏡』には「文武二道」「文武の二道」は一例も用いられていないのである。

## 6 聖代・明時 —— 新層の表現(2) ——

次に、新層の部分に出てくる「聖代明時の洪業より出て」に注目する。中国での出典は別として、日本でのそれは『本朝文粹』巻五・一二六番(貞元二年(九七七)六月十四日、菅原文時の作)がその代表だろう。

且つ夫れ、聖代の丘園には、昔猶ほ遺徳多く、明時の朝市には、

今必ず隠才有らん。

『本朝文粹』は『後三年合戦絵詞』序文の表現世界からするとやや隔たっているかもしれない。『吾妻鏡』には、「聖代」は一例、明時は一例、用いられているが、別々の日付のところであり、セットで用いられているわけではない。覚一本『平家物語』では、「聖代」は四例あるが、「明時」は見られない。

これについては、延慶本『平家物語』に近い例がある。延慶本には「聖代」も「明時」もそれぞれ三例あり、そのうちセットが一例ある(第二末「山門衆徒為都婦奏状捧事都婦有事」)。

云何ナル非法非礼ナレドモ、聖代モ明時モ必御裁許アリ。

これなら、『後三年合戦絵詞』序文での用いられかたに、ますます近い。このような表現は、実務文書的なものではなく、ある程度の教養層の用いるものと考えられる。それと、序文の新層とが重なる。ちなみに、「洪業」は、『文選』巻五に見られる表現だが、『吾妻鏡』にも、延慶本や覚一本の『平家物語』にもみられない。

## 7 神明仏陀 —— 新層の表現 (3) ——

次に、新層の部分に出てくる「神明、仏陀」の余化にあらずといふこととなし」に注目する。『吾妻鏡』には「神明」が一五例、「仏陀」が三例、それぞれあるが、別の日付の記事の中で出てくるものであり、「神明仏陀」の用例は一例もない。ところが、覚一本『平家物語』巻二「教訓状」には、

神明の加護にあづかり、仏陀の冥慮にそむくべからず。神明、仏陀、感応あらば、君もおぼしめしなをす事、などか候はざるべき。とあるほか、巻二「卒都婆流」にも、

卒都婆を作り出すに随て、海に入れば、日数つもれば、卒都婆のかずもつもり、その思ふ心や便の風ともなりたりけむ、又神明、仏陀もやをくらせ給ひけむ、千本の卒都婆のなかに一本、安芸国厳島の大明神の御まへの渚に、うちあげたり。…(中略)昔素盞烏尊、三十一字のやまとうたをはじめをき給ひしよりこのかた、もろくの神明、仏陀も、彼詠吟をもッて百千万端の思ひをのべ給ふ。入道も石木ならねば、さすが哀れにぞの給ひける。

とみえていて、さらに巻七「木曾山門牒状」に「是ひとへに神明、仏陀のたすけ也」、同「平家山門連署」に「若神明、仏陀の加備にあらずは」などとあつて、『平家物語』の世界ではしばしば用いられる表現であつたことがわかる。延慶本『平家物語』は、「神明仏陀」の四字熟語で八例も使用されている。やはり、序文の新層の表現は『吾妻鏡』ではなく——覚一本『平家物語』に近いようである。

## 8 静謐・安全 —— 新層の表現 (4) ——

次に、新層の部分に出てくる「当時天下の静謐、海内の安全」に注目する。『吾妻鏡』には「静謐」が七例、「安全」が一例あるが、セットで用いられたところは一例もない。ところが、『平家物語』

巻七「返牒」には、

夫叡岳にいたつては、帝都東北の仁祠として、国家静謐の精祈をいたす。しかるを、一天久しく彼天逆にをかされて、四海鎮に其安全をえず。顕密の法輪なきが如く、擁護の神威しづすたる。

がある。「静謐」と「安全」とをセットで使用する認識は、『後三年合戦絵詞』序文の新層と近いとみてよいだろう。ちなみに、延慶本『平家物語』では、「静謐」はなく、「安全」は一例のみであるから、当然セットもない。

## 9 東塔南谷 —— 新層の表現(5) ——

次に、新層の部分に出てくる「是等の来由につきて、此画図、東塔南谷の衆議として其功を終ふ」に注目する。これは修辭というより地名なので、ここで取り上げるのは適切ではないかもしれない。しかし、気になることがある。覚一本『平家物語』に二度「東塔南谷」が出るのである(もちろん『吾妻鏡』にはない)。「平家物語」巻二「一行阿闍梨之沙汰」で、大衆が前座主明雲の身柄を奪還した際に、「三台槐門の家をいでて、四明幽溪の窓に入しよりこのかた、ひろく円宗の教法を学して、顕密両宗をまなびき。たゞ吾山の興隆をのみ思へり」とあり、このあと明雲の身柄を「東塔の南谷、妙光房」へ入れたのである。右の「顕密」「吾山」は序文の新層にみえる語であるし、右の場面の範囲内に「山門の御威光」の語もある。

つまり、「東塔南谷」に限らず、『後三年合戦絵詞』序文の新層に近い言葉が、覚一本『平家物語』のこのあたりにはちりばめられているのである。あと一例は、覚一本『平家物語』巻八「山門御幸」で、平家都落ちに巻き込まれまいと逃れた後白河院が、一時、「東塔の南谷、円融房」に入っている。これについては、延慶本も「東塔南谷」が二例あり、ほぼ同じである。

前稿ではこれを文字通りの比叡山の地名と考えて、のちに比叡山の東塔南谷に住んだ天台僧正の存在と結びつけて考えたのである。しかし一方で、この地名は『後三年合戦絵詞』序文作者の居住地を指す目印ではなく、『平家物語』から一種の修辭として引用された可能性も考えられなくはない。そうなるとこれは、虚構としての地名であって、実体はないということになる。

\* \* \*

『吾妻鏡』の言葉と覚一本『平家物語』のそれとで共通性を持たない部分に着目し(片方に用例が皆無であるなど、それと『後三年合戦絵詞』序文の表現の古層・新層との共通性を探ってみた。古層の使用語彙は『吾妻鏡』と重なっているのに対して、新層のそれは覚一本『平家物語』に近いようにみえる。ただし、どちらの層も、『文選』や『本朝文粹』などから表現をもってくることは考えられる。実際に、古層でも、「嘲風咲月」という表現は、『吾妻鏡』や覚一本『平家物語』にはみられないが、早いところでは、『本朝文粹』巻六・

一五一番〔天徳二年(九五八)正月十一日、菅原文時の作〕に、

然而、紫宸殿の皇居には、七廻、賢聖の障子に書き、大嘗会の

宝祚には、両度、画図の屏風を懸せり。〔原漢文。番号は新日本

古典文学大系による。訓説は柿村重松(一九三二)を参考にしてわたくしに訓説した。以下同じ。〕

がある。ほかにも、

嘲風咲月之才、籍五花而言志。(三三〇番、大江朝綱の作)

(風を嘲り月を咲ぶの才、五花を籍して志を言ふ。)

嘲風咲月之思、対暁灯而猶高。(三三二番、藤原篁茂の作)

(風を嘲り月を咲ぶの思ひ、暁の灯に対して猶ほ高し。)

がある。

中世以降、他人を嘲り笑う意味の「嘲弄」が一般化して、「嘲風咲月」のような雅語的表現は衰退していくと考えられるので、序文の古層にそれが見えるのは時代相を反映した現象なのかもしれない。

これらのほか、「武徳」「美歎」「政理」「精美」「能筆」については、「吾妻鏡」にも寛一本や延慶本の「平家物語」にもみられない(「正理」なら一例ある)。「吾妻鏡」には、「後素」は一例、「絶妙」は四例ある。一例の「後素」は、文治五年(一一八九)十二月九日条にある。これらは、言語文化圏を限定する材料には、なりにくいものだろう。

## 六 「狂言戯論」の時代性

### ——鎌倉後期の匂い——

序文の古層の部分に、表現の時代性を表す言葉がある。それは、「狂言戯論」の端といふことなかれ」の「狂言戯論」である。通常ならば「狂言綺語」とあるべきで、しかもその用法は僧侶らしからぬ「たわごと」の意味で用いているようだ。言うまでもなく僧侶が仏語としてこれを用いる場合には、妄語的で罪深いとされる文学的表現でも仏乗を讃えたり法輪に転じたりする方便ともなるならば許される、という意味で、自らの表現する行為に畏怖を感じつつも表現せざるを得ない心情から発せられるのが通常である。『大漢和辞典』『広漢和辞典』『日本国語大辞典』などの辞典類に「狂言綺語」は立項されているが、「狂言戯論」という語は見いだせない。『抄物資料集成』(第七巻および別巻『統抄物資料集成』の索引類によっても、「狂言」はあるが「戯論」という語は見られない。その他、データベース類を検索してみても、「狂言戯論」という語は見当たらない。つまり、この序文の作者の造語である可能性がある。

鎌倉期の法語も含めて文献資料を概観してみると、「狂言綺語」とは別に、「狂言」と「戯論」(けいろん)とが別々に用いられている例が散見する。「戯論」の用例のほうが少ないのでそれに注目してみても、鎌倉中後期にあつてもっとも「戯論」の語が多用されているのは、おそらく日蓮とその周辺だろう。立正大学日蓮教学研究所(二〇〇三)の「戯論」の項には、一〇例以上の使用が紹介されてい



る。その中のいくつかを紹介すると、まず、文永二年（一二六五）成立の『聖愚問答抄』上巻には次のようにある。

聖人示して云はく、「余も始めは大日に愚みを懸けて密宗に志を立つ。然れども彼の宗の最底を見るに其の立義も亦謗法なり。汝が云ふ所の高野の大師は嵯峨天皇の御宇の人師なり。然るに皇帝より仏法の浅深を判釈すべき由の宣旨を給ひて『十住心論』十卷之を造る。此の書広博なる間要を取って三卷に之を縮め、其の名を『秘藏宝鑰』と号す。始め『異生羝羊心』より終り『秘密莊嚴心』に至るまで十に分別し、第八法華、第九華嚴、第十真言と立てて、法華は華嚴にも劣れば大日経には三重の劣と判じて、『此くの如き乗乗は自乗に仏の名を得れども、後に望むれば戯論と作る』と書いて、法華経は狂言、綺語と云ひ、釈尊をば無明に迷へる仏と下せり。仍て伝法院建立せし弘法の弟子正覚房は『法華経は大日経の履物とり不及ばず、釈迦仏は大日如来の牛飼にも足らず』と書けり。汝心を静めて聞け、一代五千七千の経教、外典三千余卷には、法華経は戯論、三重の劣、華嚴経にも劣り、釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足らずと云ふ慥なる文ありや。

真言宗の重んじる『大日経』に比べて日蓮宗の根本經典である『法華経』は「戯論」であると説く先師に対して、日蓮がそうではないと反論を展開する文脈である。

これと似た文脈は、日蓮が富木常忍に与えた書である『富木殿御書』（[建治三年（一二七七）八月二十三日]）にも、次のように

みえる。

円仁慈覚大師云く、「故に彼（野中注「大日経」）と異なるなり」。円珍智証大師云く、「華嚴・法華を大日経に望むれば戯論と為す」。空海弘法大師云く、「後に望むれば戯論と為す」等と云云。此の三大師の意は、『法華経は已今、当の諸経の中の第一なり。然りと雖も大日経に相對すれば戯論の法なり』等云云。此の義心あらん人信を取るべきや不や。

慈覚大師・智証大師・弘法大師の三大師がともに、『法華経』を過去説・現在説・未來説の諸経の中の第一と一定の評価をしつつも、『大日経』に比べると「戯論」だと位置づけているが、そのようなことを信じるべきでない日蓮が富木常忍に教え論している。

さらに、『三大秘法稟承の事』（弘安四（一二八二）年四月八日）になると、注目すべき変化が起きている。

此の戒法を立てて後は延暦寺の戒壇は迹門の理戒なれば益あるまじき処に、叡山の座主始まつて第三第四の慈覚・智証、存じの外に本師伝教・義真に背きて、理同事勝の誑言を本として我が山の戒法をあなづりて、戯論と笑ひし故に、存じの外に延暦寺の戒、清浄無染の中道の妙戒なりしが、徒らに土泥となりぬる事云ふても余りあり、歎いても何かはせん。彼の摩黎山の瓦礫の土と成り、梅檀林の荆棘と成らんにも過ぎたるなるべし。夫れ一代聖教の邪正偏門を弁へたらん学者の人をして、今の延暦寺の戒壇を踏ましむべきか。此の法門は義を案じて理を詳かにせよ。

「証言」は、異本では「狂言」となっている。内容的には、「聖愚問答抄」や「富木殿御書」と同じであるが、一文の中に「狂言」と「戯論」とが同居するに至っている。もともとは「真言」と対置的な概念として「戯論」が意識されてきたのだが、その「戯論」が、古くからある「狂言綺語」と接近し始めたことを示す例だろう。

いま日蓮宗の文書を三種挙げたが、これと重なる時代に成立した『沙石集』（弘安六年（二二八三））の序にも、「狂言綺語」と「戯論」の接近が見られる。

然レバ狂言綺語ノアダナルタハブレヲ縁トシテ、仏乗ノ妙ナル道ニ入シメ、世間浅近ノ賤キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知シメント思フ。…（中略）…愚ル人ノ仏法ノ大キナル益ヲモ悟ズ、和光ノ深キ心ヲモ知ラズ、賢愚ノシナコトナルヲモ弁ズ、因果ノ理定まれる、猶モ信ゼヌ為ニ、或ハ経論ノ明ナル文ヲヒキ、或ハ先賢ノ残セル誠ヲノス。夫道ニ入ル方便一ツニ非ズ。悟ヲ開ク因縁是レ多シ。其大キナル意を知れば、諸教義異ならず。修スレバ万行旨ミナ同キ者哉。此故ニ、雑談ノ次ニ教門ヲ引、戯論ノ中ニ解行ヲ示ス。是ヲ見ン人、拙キ語ヲ欺カズシテ、法義ヲ悟リ、ウカレタル事ヲタダサズシテ因果ヲ弁へ、生死ノ郷ヲ出ル媒トシ、涅槃ノ都ニ至ルシルベトセヨトナリ。コレ則愚老ガ志ナリ。（後略）

鎌倉新仏教が草創期を抜けて教団化の過程をたどるなかで、他宗と自宗との違いを明確化したり、真と偽（戯）との差異を再確認したりして、自らの立場を先鋭化させていったのだらう。そのような

時代的空氣を受けて、臨濟僧でありながらも偏りの少ない「当代屈指の博学多識の僧」（日本古典文学大辞典）であった無住も「狂言綺語」「戯論」を用いているところからみると、鎌倉後期はこのような真偽論争がブームとなっていたのではないかとみられる。

そして、東博本『後三年合戦絵詞』序文の「狂言戯論」にもっとも近い用例も、この時期に出現する。「本願寺聖人親鸞伝絵」（『親鸞聖人伝絵』「御伝抄」の奥書である『統群書類従』九上）。

右縁起図画の志、ひとへに知恩報徳のためにして戯論狂言のためならず。あまつさへまた紫毫を染めて翰林を拾ふ。その体もつとも拙し。その詞これ苟し。冥に付け頭に付け、痛みあり恥あり。しかりといへども、ただ後見の賢者の取捨を憑みて、當時愚案の訛謬を顧みることなきのみ。（原漢文）

永仁三年（二二九五）に親鸞の曾孫覚如によって書かれた奥書である。「狂言戯論」と「戯論狂言」は語順が転倒しているだけの近さである。このような語彙が宗派を超えて宗教界で鎌倉後期に用いられていたということではないだろうか。そのこと以上に注目しておきたいのは、右の例が、「親鸞聖人伝絵」という——原態は不明だが——一種の絵巻物に近いものの奥書に、もてあそびものではない、という趣旨で用いられているのであるから、『後三年合戦絵詞』序文とまったく同じシチュエーションで使用されているといつてよい。

このように経緯をたどってみると、「狂言戯論」は「狂言綺語」の崩れた語ではなく、「戯論」を中心に用いられた文脈に「狂言」

が擦り寄って合成されたものとみてよいだろう。この流れからすると、『後三年合戦絵詞』序文の「狂言戯論」もこの鎌倉後期の言語文化圏から生まれた表現だといつてよさそうだ。これ以降中世のどの時期にも「狂言戯論」や「戯論狂言」は使用されうるはずだが——文字どおりの管見ゆえか——、今のところこれ以外の使用例を見出だしていない。鎌倉後期に流行した言い回しである可能性を、現段階では考えておいてよいだろう。

## 七 各巻筆者の時代性の再検討

三条西実隆は、『実隆公記』永正三年（一五〇六）十一月十二日条に、次のように記している。

十二日丁亥 霽、入夜雨降、自禁裏後三年合戦絵（傍注『武衛家衡対治事』）可披見之由被仰之、一覽殊勝々、詞源惠法印草也、第一尊円親王 第二公忠公（割注『于時大納言』）第三六条中納言有光 第四仲直朝臣 第五保脩朝臣 第六行忠卿。（傍線野中）

この傍線部が東博本『後三年合戦絵詞』各巻奥書の、

上巻…詞 仲直朝臣

中巻…詞 保脩朝臣

下巻…詞 従三位行忠卿

画工 飛驒守惟久

と一致するので、従来、現存の東博本の状態のもので六巻揃っている

たものを実隆が鑑賞し、各巻奥書の六人の人名（源惠法印を入れて七名）を書き留めたのだらうと考えられてきた。ところが前稿で、

1、東博本の各巻末に記された奥書は同筆であることから、後次的に追記されたものである可能性が高いこと

2、しかもそれらは序文とも同筆であることから、現存の序文が付装された際に巻末奥書も追記された可能性が高いこと

3、自分のことを「行忠卿」などと書くことはありえないことから、実際の各巻筆者（各巻ごとに筆跡が異なる）ではない別の人物がそれを書いているらしいこと

を指摘した。そして、もともと六巻を収めた箱書きに「源惠法印草」

「第一尊円親王 第二公忠公 第三六条中納言有光 第四仲直朝臣 第五保脩朝臣 第六行忠卿」「画工 飛驒守惟久」などと書かれていて、一方では実隆がそれを『実隆公記』に記し、もう一方で家康・天海のころに各巻末に追記されたのだらうと考えた（『画工 飛驒守惟久』の情報は『実隆公記』に記されていないので、『実隆公記』を見ながら各巻末奥書を書いたのではなく、箱書きにあったのだらう）。

ところで、そこに現れた八名の人名（六巻分の詞書筆者+源惠法印+飛驒守惟久）の時代性に矛盾があることは、先行研究でも指摘されている。とくに問題になってきたのは、三条公忠の「于時大納言」と世尊寺行忠の「従三位」との関係である。「于時大納言」に素直に従えば、公忠が大納言であったのは貞和三年（一三四七）九月十六日から延文五年（一三六〇）九月三十日の間であり、これだと「貞和三年」の序文とぎりぎり符合することになる。貞和三年の九

月十六日以降、その年の年末までの三か月余りの期間に執筆・追記されたのならば、序文と公忠の「大納言」（正確には権大納言）とが一致することになる。

ところが一方で、世尊寺行忠は「貞和三年」当時はまだ「従三位」にはなっておらず、彼が従三位であったのは延文三年（一三五八）十一月十四日から康安元年（一三六一）六月六日までの間なので序文の「貞和三年」とは合わない。

しかし、序文の「貞和三年」は別にして、公忠が「大納言」であり、行忠が「従三位」であった時期ならば、延文三年十一月十四日から同五年九月三十日の二年弱は両者が重なる。しかし、これだと序文の「貞和三年」とは合わなくなる。

さらに宮次男（一九六七）は、「于時大納言」ということは、公忠が第二巻の詞書を執筆した時には「大納言」であったとしても、その奥書が追記された際にはすでに大納言でなくなっていたと考え、詞書執筆の時期（『東博本絵巻の制作時期』と各巻奥書の追記の時期とを二重に考えようとした。古谷稔（一九七七）は、第二巻の奥書に「于時大納言」とあったのではなく三条西実隆が『公卿補任』を見て補記したのだろうと考えた。

このように先行研究はこの解釈に難渋してきた。ついでにいうならば、「六条中納言有光」とあるが有光が中納言（権中納言）であったのは康永二年（一三四三）八月十三日から同三年十二月二十九日のことであるから、これも合わない。ただし、「前権中納言」となっているから通称として「六条中納言」と呼ばれ続けた可能性はあるだけ

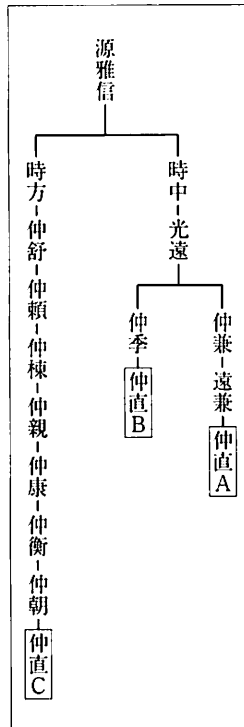
ろう。

尊円親王は永仁六年（一二九八）六月二十三日に生まれた人物だが親王宣下を受けたのは延慶三年（一三一〇）で、翌四年（一三一二）に仏門に入り、名を尊円と改めて青連院門跡に就任したので、「尊円親王」などと表現できるのは一三二一年以降のこととなり、正平十一年（一三五六）九月十三日に没するまでの四年間が「尊円親王」として第一巻の詞書を執筆しうる期間ということになる。世尊寺行忠は尊円親王の没後二年してから「従三位」になったのであるから、これまた合わないことになる。

保脩は持明院保脩のことで、『公卿補任』には記載がないが「尊卑分脈」に二か所記載があり、それによると「藤原基頼—通基—基家（持明院家の祖）—保家—基保—保藤—保有—保脩」とあり、傍注に「左少将従四位下」（国史大系本第一篇二四二頁）、「能書人 左中将正四位下 早世」（同二六四頁）とある（前者が早い時期、後者がのちの時期のものらしい）。その生没年を推定する根拠としては、保脩の弟保冬が明德三年（一三九二）に六十四歳で没していることが手がかりになる。保冬の生年は元徳元年（一三二九）となり、その兄としてかりに五歳年上だとすると、保脩の生年は正中元年（一三三四）となる。そして保脩は「早世」したということだから、かりに四十歳まで生きたとすれば没年は一三六四年ごろということになる。序文の「貞和三年」、公忠の「大納言」、行忠の「従三位」のいずれとも矛盾はしない。何よりも注目しておきたいのは、「能書人」と記されていることである。また、持明院家であることも、とくに目を

引く。のちに、元禄十四年（一七〇二）に持明院基時が東博本（当時  
は池田家蔵）『後三年合戦絵詞』を修理しているのだが、それは先祖  
保脩がこの絵巻物の制作に関与していたというような家伝が存在し  
たためかもしれない。

六人の詞書筆者の中でもっとも実在性を確認しにくいのは、仲直  
である。『公卿補任』には見えない。『尊卑分脈』には三人の仲直が  
おり、いずれも宇多源氏で、次のような関係である。



仲直Aは叔父仲雅が「八条院蔵人」を務めた人物なので、時代的  
に早すぎる（八条院障子は建暦元年（一二二二）没）。仲直Bは当人が  
「安嘉門院蔵人」を務めていて時代的にやや早い、それが若いこ  
ろの職だとすれば序文の「貞和三年」と合わなくはない（安嘉門院  
邦子は弘安六年（一二八三）没）が厳しさは残る。行忠の「従三位」  
（一二三八）と合わせるの、まず無理だろう。仲直Cは父仲朝が  
「後嵯峨院上北面」なので、時代的には一番無理がない（後嵯峨院の  
院号は寛元四年（一二四六）以降で没年は文永九年（一二七二）。仲直C  
の傍注には、「文殿寄人 上北面 細工所別当 従四位上 治部大  
輔 弾正大弼」とある。「文殿」（文書管理）や「細工所」（職人集団

管理）は絵巻物制作に近い部署だともいえる。

この六人の時代性は、三つのグループに分かれている。行忠の  
「従三位」を重視すれば一三五八―一三六一（第一グループ）。公忠  
の「大納言」、尊円や保脩の在世、「貞和三年」と合うのは一三七  
年（第二グループ）。ただ注意すべきは、尊円、公忠、有光、行忠、  
それに「能書人」と記された保脩も含めてほとんどが当時の「有名  
人」だと考えられることである。いかがわしい人名が入ってくると  
すれば有名人である可能性が高い——絵巻物の権威づけのために  
——から、むしろ仲直のような無名人のほうに信憑性があると  
いえるのかもしれない。

さて、前稿で指摘したように、序文と各巻奥書は、同筆であるら  
しい。序文の「貞和三年」もちろん信頼できない。宮や古谷は、  
三条西実隆が東博本絵巻の奥書を見ながら「実隆公記」に記したと  
考えたが、それも怪しいことを指摘した。実隆の記述の中に、序文  
の存在はない。各巻の奥書も含めて、家康のころに捏造されたもの  
と考えたのである。実隆が、「詞源恵法印草也。第一尊円親王、第  
二公忠公（割注「于時大納言」、第三六条中納言有光、第四仲直朝臣、  
第五保脩朝臣、第六行忠」と記したのは、箱書きにあったものかも  
しれないと推定した。各巻奥書があとから追記されたということ  
は、当然のことながら、もとはそれが存在しなかったということだ  
から、箱書きにあった情報を実隆が記したと考えたのである。それ  
が、無理のない考え方だろう。虚心に「実隆公記」を読めば、ここ  
には序文の「貞和三年」もないし、行忠の「従三位」もないので、

公忠の「大納言」が唯一の限定的な期間を示す材料となる。公忠が大納言であった貞和三年（一三四七）から延文五年（一三六〇）の間のうち、尊円親王が没する正平十一年（一三五六）九月十三日以降を除いて一三四七～五六を絵巻物の制作年と考えれば（第二グループ）、『実隆公記』を唯一の史料とみた場合の整合性はつく。ただし、その時期だと、仲直Bはまず無理で、仲直Cもやや苦しい感じは残る（仲直Cは二六〇年前後の生まれだろう）。しかも、この仲直という人物こそ、無名の人物という点においてもっとも重視すべきであるから、厄介である。

仲直Cや次節で指摘する「源恵法印」の時代性は、鎌倉末期（後述）で、これが第三グループとなる。『後三年合戦絵詞』の序文、奥書、実隆の記録などその伝来にかかっていたとされる八名の人名の時代性を三つのグループとして把握してみたが、これを時系列に沿って並べ直すと、鎌倉末期のグループ、南北朝中期のグループ、南北朝後期のグループに分かれる。これらの玉石混淆の人名群の中に、原序文の起草や『後三年合戦絵詞』の制作に関与した古層の人名が一部にあり、その後の伝来の過程で、それを消去しないまま当時の「有名人」を適当に覆いかぶせていったのではないだろうか。

## 八 玄恵ならぬ源恵の実在

前節で六人の詞書筆者の時代性について考察したが、これ以外にあと二人の人名がある。一人は「画工 飛驒守惟久」で、もう一人

は「源恵法印」「法印権大僧都玄恵」である。飛驒守惟久については後述する（第一〇節）。

ゲンエについては、十分な考察を要する。「源恵法印」と「法印権大僧都玄恵」は同一人物なのだろうか。後者「玄恵」については、小木曾千代子（二〇〇八）が指摘するように、伝承世界で増幅された部分の大きい人物である（それを根拠にこの序文の虚構性を疑ったのもあった。前稿）。問題は前者である。「源恵」ないしは「源恵法印」なる人物がいるのかどうか。

じつは、源恵は鎌倉幕府第四代將軍藤原頼經の子であり、天台座主にまでなった人物である。「尊卑分脈」の「源恵」には、「法務大僧正 天台座主九十七 本覚院 最源僧正資 又尊家法印資」或記云 正応六年二月廿六日為異国降伏於禁裏始修七仏藥師法云々同廿六日蒙牛車宣旨」とある。正応六年は、一二九三年である。「或記」については、ほぼ同文の記事が『華頂要略』にあるので、天台系の典籍を指すのだろう。ただし、『華頂要略』卷三十二「源恵大僧正」によると、源恵は異国降伏のための修法を、正応二年（一二八九）六月十八日、正安三年（一二三〇）にも行っている。また、『天台座主記』卷一「九十七世源恵」には、「本覚院 妙法院 治山八箇月」「征夷大將軍大納言頼經公息 尊家法印受法灌頂 正応五年（壬辰）九月四日補座主 正応六年（癸巳）四月廿六日辭職」だけしか記述がない。わずか八か月しか、その職にいなかったためだろう。

源恵は日光山（現在の輪王寺）の第二十七代の別当でもあったの

で、日光山史編纂室（一九六六）、栃木県史編さん委員会（一九八四）、栃木県歴史人物事典編纂委員会（一九九五）、千田孝明（二〇〇五）にもよく整理されたものがある。これらをもとに源恵の生涯を略述すると、源恵は寛元二年（一二四四）に第四代將軍藤原頼經の子として鎌倉で生まれた（第五代將軍頼朝の弟にあたる）。本覺寺門跡を経て文永十一年（一二七四）に日光山の第二十七代別当となり、建治二（一二七六）に常行堂置文十四か条を定めて、前別当隆家の定めた置文二十二か条を改定している。時期は不明ながら、おそらく日光山別当に任じられた当初から鎌倉勝長寿院の別当をも兼務した。ゆえに、日光山別当に就任したあとも鎌倉（葛西谷）に居住し続けたと考えられている。当時の日本は、元寇の脅威（文永弘安の役）にさらされていたので、源恵は幕府の祈禱僧として活躍したようで、「鎌倉後期の東国の顕密仏教界を代表するプリンス」（千田孝明（二〇〇五））であった。その後、正応五年（一二九二）に天台座主に補せられ、八か月間だけ天皇の護持僧を務めた。徳治二年（一二三〇）十月二十日に六四歳で死去している。

三条西実隆が「源恵法印」と書いたのは、この人物だった可能性があるのではないか。そもそも小木曾千代子（二〇〇八）によれば、「太平記」作者にも擬せられたあの玄恵が「源恵」などと表記された例は、この序文以外に一例もない。書き間違いなど、考えられないのではないだろうか。前節までの考察も合わせて考えると、東博本『後三年合戦絵詞』の序文には偽書の疑いがあるものの、その文言には二層性が認められ、偽書性格を有するのはその後次の層

についてであるということ、それをはがすと原型的な層が見えてくるということであった。その原型的な層（古層）は鎌倉時代的であった。「法印権大僧都玄恵」はその後次の部分に含まれていたものと考えられ、三条西実隆が『実隆公記』で記したのは、それとは別の「源恵法印」だったのではないだろうか。実隆が後三年合戦にかんする六巻本の絵巻物を鑑賞した際には「源恵法印」の名前は箱書きのようなものとして書かれていたのであり、その後、鎌倉後期の「源恵法印」を知らなかったか、あるいは知っていても「玄恵」に託したほうが有利と考えた改作者（天海）が、ゲンエ違いの「玄恵」の名を借りて、序文の増補を行ったという推定である。山王の權威を發揚するために、もしくはこの序文の誘導性をさらに隠蔽するために、である。逆に、その古層の部分を起草したのが、鎌倉後期の「源恵法印」だったのではないか（一般に、改作者は前作を跡形もないほど消化してまるごと文章を再生産することはめったになく、前作の部分を残しながら新たな層の言葉を接合的に混入させるものだろう）。

もともと「源恵」が鎌倉後期に絵巻物の制作に関わったという事実があったとして、それが絵巻物の箱書きに「源恵法印」などと記されるかたちで残り、そこからゲンエつながりで「玄恵」にジャンプしたのだろうと推定しうる。逆をたどった言い方をすれば、一部分に後次の虚構部分があつたとしてもその史料を全否定することなく、その中に古層の部分をつかみとることができれば、そこにいては史料として使えるのではないかということである。

さて問題は、鎌倉後期のこの源恵が「法印」と称した時期があつ

たかどうかである。栃木県史編さん委員会（一九七三）の「日光市」「輪王寺文書」の第五号「常行堂置文」の末尾には、次のように記されている。

右以前条々、所被遂加如件

（三〇五）  
建治二年丙子後三月五日

別当法印大和尚位（花押）

この「別当法印大和尚」は、この「建治二年」時点で日光山の「別当」であったことから考えて源恵であると考えられている。『栃木県史史料編中世一』でも、この「別当法印大和尚位」の脇に（源恵）と注記している。源恵は、一二七六年の時点で、「法印」を名乗っていたのである。

また、同じ文書の第八号「日光山座主源恵御教書」の末尾にも、次のようにある。

依 仰執達如件

（三〇五）  
嘉元三年五月三日 法印（花押）

上執事法眼御房

これはもともと「源恵御教書」として伝来していたもので、そこに「法印」と記されているのである。先の文書からすると三〇年後のもので、その間に八か月間の天台座主の時期を含んでいるのだが、鎌倉に戻った源恵は、再び「法印」を名乗っていたらしいのである。

こうして、『後三年合戦絵詞』序文の伝来に関して、三条西実隆が「源恵法印」と記した人物は、この第九十七世天台座主、第

二十七代日光山別当の源恵である可能性が、有力な候補として浮上する。

## 九 〈後三年トラウマ〉の顕著な時代性と源恵の立場

野中（二〇一一）において、『吾妻鏡』や半井本『保元物語』にみえる〈後三年トラウマ〉について指摘した。後三年合戦は私戦だという社会的評価を受けてしまったため——世論を誘導してそれに大きな役目を果たしたのが『後三年記』——、その後の院政期、鎌倉期の武士たちは、合戦をする際には〈公権力〉を背負って戦うことを強く願うようになった。半井本『保元物語』で、源義朝は、「宣旨ヲ蒙テ」戦うことが「家ノ面目」だと言い、それがなければ「私ノ合戦」とされて「朝威ニ恐テ、思様ニモ振舞」えないと語る。『平治物語』では、後白河院や二条帝の身柄のあるほうが官軍であるかのような争奪が繰り広げられ、『平家物語』でも、木曾義仲が西国に落ちようとする前に後白河院の身柄確保を試みている。源頼朝は鎌倉に幕府を開くという形をとって戦時体制を演出し、それによって征夷大將軍に任じられた。それは、天皇を絶対的な存在として仰ぐことを前提として、その配下において軍事政權を正当化し、武力行使に大義名分の立つ方法を考案したようなものであった。

当然のことながら〈後三年トラウマ〉は、『吾妻鏡』にも影を落としている。次は、文治五年（一一八九）六月三十日条である。

（頼朝が大庭に）奥州征伐の事を仰せ合はされて曰く、「此の事、



天聰を窺うところ、今に勅許なし。なまじひに御家人を召し聚む、これを如何となす。計らひ申すべし」てへれば、(大庭)景能思案に及ばず、申して云はく、「軍中將軍の令を聞き、天子の詔を聞かず」と云々。已に奏聞を経らるるの上は、あなたがちにその左右を待たしめ給ふべからず。随つて泰衡は累代御家人の遺跡を受け継ぐ者なり。綸旨を下されずと雖も、治罰を加へ給ふこと何事かあらんや。就中、群參の軍士数日を費やす条、還て人の煩ひなり。早く発向せしめ給ふべし」てへれば、申し条頗る御感有り。

朝廷から裁可の下りないまま軍を動かしてよいのか思い悩む頼朝に対して、大庭景能が「軍中」では「天子の詔」よりも「將軍の令」に従うべきと進言したものである。なぜ、「天子の詔を聞か」なくてよいかと言えば、「天子」より上位の「神威」が次のように付いているからである(『吾妻鏡』同年七月八日条)。

千葉介常胤、新調の御旗を謙ず。其の長、入道將軍家(頼義)の御旗の寸法に任せ、一丈二尺、二幅なり。又、白糸の縫物有り。上に云ふ、伊勢大神宮、八幡大菩薩と云々。下に鳩二羽(相對すと云々)を縫ふ。是、奥州追討の爲なり。

「天子の詔」を超えるものとして、頼朝軍には「伊勢大神宮、八幡大菩薩」が付いているというのだ。(公権力)によって正当性を付与されない軍事に不安を持った者(実体としての頼朝か『吾妻鏡』編者か)が、それを超える論理として(神威)を持ち出したのだろう。元来大義名分の薄いはずの奥州合戦(平泉藤原氏討伐)に、伊勢・

八幡の神威というお墨付きの存在を印象づけることによって、それを正当化したのである。そのような表現行為の背景に、私戦と評されることを恐れ公戦であることを渴望する意識、すなわち(後三年トラウマ)の存在がまざまざと窺える。

次は、藤原清衡の初期の経歴について記された『吾妻鏡』文治五年九月二十三日条である。

清衡、継父武貞(荒河太郎と号す。鎮守府將軍武則が子)卒去の後、奥六郡(伊沢和賀・江刺・稗拔・志波・岩井)を伝領し、去る康保年中、江刺郡豊田館を岩井郡平泉に移し宿館となす。(原文では括弧内は二行割書き)

清衡が清原武貞から奥六郡を伝領したとする記述には、明らかに不自然さがある。真衡の存在を無視しているからである。『後三年記』の冒頭には、真衡の「威勢」が「父祖にすぐれて、国中に肩をならぶるもの」がないと書かれていて盤石な真衡政権像が窺えるし、「荒河太郎武貞が子、鎮守府將軍武則が孫なり」という系譜的な言いかたに、順調に世代の交代がなされてきたニュアンスがにじみ出ている。ところが、武貞から——真衡を飛ばして——清衡へと奥六郡が直接伝領されたとする『吾妻鏡』の右の記述は、このような想定を裏切るものである。『吾妻鏡』は、意図的に清原真衡の姿を消し去ったとしか思えない。真衡の名を出せば、読者に『後三年記』や後三年合戦を想起されてしまう。『吾妻鏡』の表現主体は、それを恐れたのだろう。

このように、『吾妻鏡』には、黒いものを白だと言わんばかりの

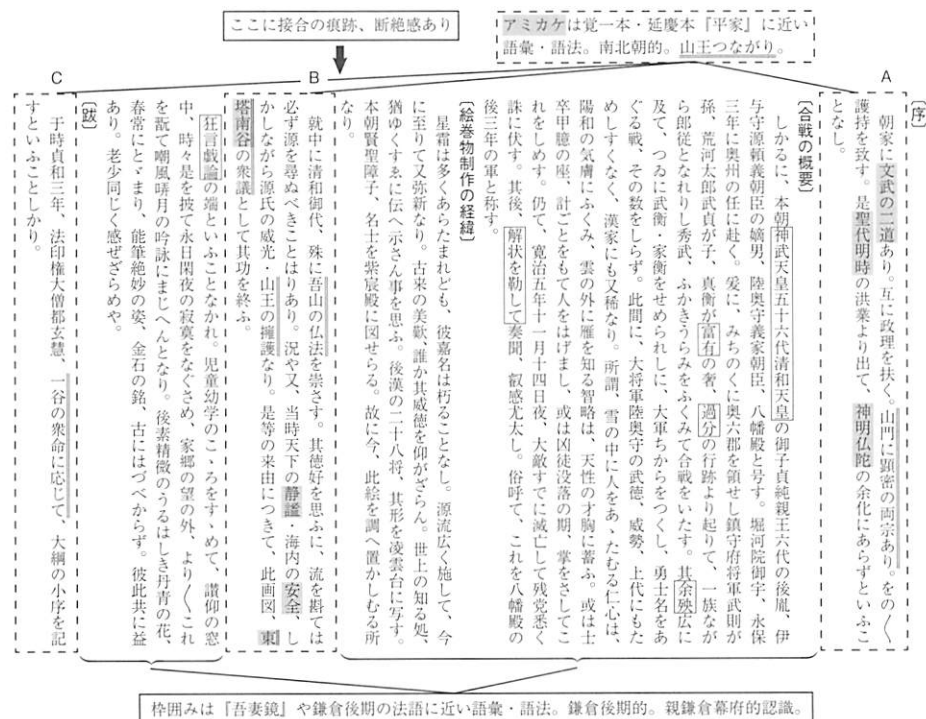
強い意思が窺える。その編纂時期は、一二七〇～一二三〇年ごろとされている。元寇以降、求心力を失い続ける幕府が、この歴史叙述にその回復を託してもいただろう。その時期は、第四代將軍藤原頼經の子である源恵の時代とも重なり、また『吾妻鏡』の強引な表現手法は、「首をみちにすて、むなしく京へのぼりにけり」で結ぶ『後三年記』を平然と無視して「解状を勅して奏聞、叡感尤太し」と言い切る『後三年合戦絵詞』序文とも通じる（同一の作者というわけではなく共通認識に支えられた同一の文化圏という意味）。逆の見方をすれば、これほどの露骨な源氏擁護の意識に基づく読み替えが——たとえ第二の源氏政権と位置づけられるものであったにしても——足利政権樹立後になされたとは考えにくい。そのころの関心事はすでに公私ではなく開始していたのである（北朝と南朝、二つのオオヤケが存在するゆえにいずれにしても公であった）。

もともと、いくさの名称などなかったのに「後三年」などと名付けられたのも、鎌倉中期のことであった（半井本『保元物語』が初出）。私戦とされた後三年合戦を躍起になって公戦化しようとする歴史の塗り替えが強力に行われた時期であった。『吾妻鏡』建暦三年（一二二三）五月二日条で三浦為次の子孫が後三年合戦を自家の始源だと位置づけているように、このいくさに名称を与え、正当に——彼らの論理における「正当」——位置づけ直し、堂々と歴史を語れるようにしたかったのだろう。鎌倉幕府の体制が揺らぎ始めたとき、御家人が一番必要としたものはそのアイデンティティだったと考えられるのである。『吾妻鏡』の編纂時期でもある一二七〇～

一二三〇年ごろは、〈後三年トラウマ〉からの脱却が重要な課題として歴史上もつとも表面化した時代であったと考えられる。源恵は、その生きた時代が〈後三年トラウマ〉の時代と重なるだけでなく、鎌倉將軍頼經の子であるという幕府寄りの立場とも符合し、身分上も絵巻物の序文を起草するにふさわしい地位を有している。そのうえで、「叡感尤太し」と言い切ろうとする指向が、『吾妻鏡』の捏造性の濃い指向と軌を一にするものであることは重視してよいだろう。この「源恵」が「法印」でもあったのだ。時代性（鎌倉後期）——立場（鎌倉將軍頼經の子）——認識（トラウマ）——呼称（源恵）——職位（法印）——営為（誘導的な序文の制作）と、ここまでの連動性をみると、もはや偶然の一致とは言えないのではないだろうか。

これまでに述べてきたことを図示してみると、次頁のようになる。

接合の痕跡、断絶感を突破口として、『吾妻鏡』的（鎌倉後期の法語を含む）な語彙・語法と『平家物語』的（とくに寛一本）的な語彙・語法の二層の文章から成っていることを論証した。そして、それぞれを支えている指向が、鎌倉政権を擁護するもの、山王の権威を发扬するものの二種類であることも明らかになった。語彙・語法の点で言えば、『吾妻鏡』に見られることだけを指摘したのではなくそれが『平家物語』に見られないことをも指摘したのであり、また、『吾妻鏡』に見られないことだけを指摘したのではなくそれが『吾妻鏡』に見られないことをも指摘したのである。ここまできると、『後三年合戦絵詞』序文の二層性は、もはや疑いようがないのでは



あるまいか。もしその考えが認められるとすると、序文の古層こそが、『後三年合戦絵詞』の本来の成立時期や成立圏を示唆する材料を含んだ部分ということになる。

『後三年合戦絵詞』序文の古層にみえる鎌倉後期的時代位相と、『源惠法印』の親鎌倉幕府の立場、そして何よりも「源惠法印」という名称の一致点を見ると、原序文は、鎌倉後期に源惠法印によって起草され、それに連動していたであろう繪巻物本編も含めて、鎌倉の地（あるいは京の六波羅周辺）で成立したのではないかと考えざるをえなくなってくる。この想定のもとに、東博本『後三年合戦絵詞』の制作時期をもう少し絞り込んでみる。

## 一〇 東博本『後三年合戦絵詞』の制作時期の絞り込み

『本願寺聖人親鸞伝絵』の「戲論狂言」が永仁三年（一二九五）であることを意識した場合、表現の伝播の経路として日蓮→覚如→源惠のほうが想定しやすく、日蓮→源惠→覚如の可能性は低いように思われる。しかし、「狂言戯論」の表現が登場する上限を永仁三年だとするほどの根拠もないので、念のため一二九〇年ごろ以降ならば登場しうる表現だと考えてよいだろう。それ以前は「戲論」の単独使用期らしいのである。一方、源惠は徳治二年（一二三〇）十月二十日に六四歳で死去しているので、それが下限となる。これらを総合すると、東博本『後三年合戦絵詞』の制作時期は一二九〇～一三〇七年の間で、制作された場所はおそらく鎌倉か六波羅という

ことになるう。

東博本『後三年合戦絵詞』は勸修寺(一四三二)↓禁裏(一五〇六)↓北条氏↓徳川家(一五九四)↓池田家(一五九四)と伝来したとされている(前稿)ので、この先頭に「鎌倉か六波羅(一二三〇年ごろ)↓」が付くことになる。

\* \*

六人の各巻奥書の人名と、詞(序文)の起草者である源恵についての検討は終えた(第七、八節)が、あと二人の人名が残されている。「画工 飛驒守惟久」である。惟久は「実隆公記」には書かれていない人名で、現存の東博本の下巻奥書に見えるものである。宮次男(二九七七)に先行研究の整理があるものの、あまりよくわかっていない人物である。

飛驒守惟久は、「破来頼等絵巻」の絵師としても知られている(「倭錦」)。この絵巻物は徳川美術館の所蔵(国指定重要文化財)で、国立国会図書館にその転写本らしき冊子体の「破来頼等絵詞」(「不留房絵詞」)がある。一四世紀前半ごろの成立と考えられている。ただし、山本泰一(一九八八)によれば、東博本「後三年合戦絵詞」と徳川本「破来頼等絵詞」は「同一人の作とは考えられない」という。

結局は、東博本「後三年合戦絵詞」のみで制作時期を分析しなければならぬということである。美術史の専門家の方々による東博本「後三年合戦絵詞」の制作年代の考定を待ちたい。

## 一一 おわりに

本稿で述べたことをまとめる。「後三年合戦絵詞」序文には古層と新層があり、その新層をはがすと古層が見える。古層の表現が「吾妻鏡」的であるのに対して、新層のそれはほぼ覚一本「平家物語」的であることが見えた。古層は源義家の名替挽回をめざす指向に貫かれており、新層は天台の権威を称揚する指向に支えられている。そして、古層の時代性を窺うと、この絵巻物の伝来はその名の見えていた第九十七世代天台座主源恵の存在が浮上する。「実隆公記」に「詞源恵法印草也」とあるが、その「詞」とは序文のことで、源恵が原序文(古層の部分、漢文体)の草稿を書いたという意味と解釈すべきなのだろう。

そして、序文に「絵巻物制作の経緯」が含まれていて、絵巻物本体にある「寛治五年」というミスをそのまま踏襲しているので、原序文が絵巻物本体と無関係に書かれた文章だとは考えられない。絵巻物本体を鑑賞しながら、源恵が原序文を起草したものらしい。

以上のように、この序文に古層が存すること、それが「吾妻鏡」に近い表現や認識を有していること、鎌倉後期に特徴的な「狂言戯論」という語が用いられていること、源恵という人物の名とその立場とがその時代相と認識に符合することから、原序文の成立は一二九〇〜一三〇七年ごろと判断してよいのではないだろうか。

あらためて、六人の各巻の筆者名のうち、たとえば一三〇〇年ごろを原序文の成立時期だとかりに想定すれば、源恵だけでなく、「文

殿寄人」「細工所別当」であつた源仲直Cも時代的に合わなくはないのである（推定四〇歳。仲直の、無名ゆえの重要性については先述）。京官にあつたらしい仲直が、鎌倉に下向したものと推測することになる。

あれほど強烈な誘導指向をもつた原序文を付装するぐらいなら、六巻本の絵巻物そのものの詞書を書き換えればよいではないかとの疑問がわく。それができなかったのは、先人が繰り出したコトバをないがしろにすることに対する畏怖の心情によるものだろう。これはすべての古典に言えることだが、歴史を塗り替えるような場合、全面的な改変をすることはまずなく、古い言説を活かしつつ、そこに新たな言説をすべりこませるのである。言霊的な言葉の霊性を理解することなしには、その苦渋の改変行為の意味も見えてこない。

ところで、原序文を約三百年後に改作した天海僧正（推定）は、間違いなく歴史上の源恵の存在を知っていただろう。なぜならば、天海も比叡山に居住したことがあるし、のちには日光山輪王寺の貫主となつてゐるからである。三世紀隔たるものの、文化圏としてはかなり近いところにいたと考えられる。天海が「後三年合戦絵詞」の序文を改作したのは文祿三年（一五九四）のことと推定されるが（前稿）、そのとき絵巻物の箱書きに「源恵法印」とあつたのを見たのではないだろうか（三条西実隆が見たのと同じように）。序文を書いたのが鎌倉將軍頼経の子である源恵だと知られば、この原序文のもつ作為性（源氏への身びいきや誘導性）がばれてしまうことを怖れ、それを糊塗する意味もあつて「山王」の加護を付加する必要が生じ

たのではないだろうか。徳川家康も源氏の末裔であることを強く打ち出そうとしていた時期であり、家康のブレインとして存在感を発揮し始めていたであろう天海が、この絵巻物の政治的な影響力を熟知したうえで、巧妙に次なる仕掛け（序文の改作）を繰り出したものと考えられる。げんに『後三年合戦絵詞』は『酒伝童子絵巻』とともに家康の娘督姫の嫁入り本として、池田輝政との政治的な紐帯を固めるために利用されたものであつた（前稿）。それは、かつての院政期・鎌倉期の武士たちにとっては重かつた（後三年トラウマ）の負い目を反転させ、源恵の格闘期も乗り越えて、誇らしい歴史として後三年合戦像を塗り替えることに成功した瞬間であつた。徳川家康がヒノモトの征夷大將軍となることを可能にしたのは、源氏の末裔であることを一点の曇りもなく誇れるという資格をもつたからこそなのである。

## 謝 辞

源恵にかんする資料については、栃木県立図書館調査相談課のご教示をいただいた。篤く御礼申し上げたい。

## 文 献

小木曾千代子（二〇〇八）『玄恵法印研究―事跡と伝承―』東京…新典社

- 小尾郊一 (一九七六) 全釈漢文大系31 『文選(文章編) 六』 東京…集英社
- 柿村重松 (一九二二) 『本朝文粹註釈 上・下』 京都…内外出版
- 小松茂美 (一九七〇) 『日本書流全史 上・下』 東京…講談社
- 小松茂美編 (一九七七) 日本絵巻大成15 『後三年合戦絵詞』 東京…中央公論社
- 渋谷慈鑑編 (一九七三) 『校訂増補 天台座主記』 東京…第一書房／千田孝明 (二〇〇五) 『中世日光山の光と影——幻の「光明院」、その栄光と挫折——』 『知られざる下野の中世』 宇都宮…随想舎
- 千田孝明 (二〇〇六) 『史料紹介「日光山別当次第」(慶長十四年写)』 『栃木県立博物館研究紀要(人文)』 23号
- 田島志一編 (一九〇五) 『真美大観』 第11巻 東京…日本真美協会
- 天台宗典刊行会 (一九七三) 『華頂要略』 『天台宗全書 第一巻』 東京…第一書房
- 栃木県史編さん委員会 (一九七三) 『栃木県史 史料編 中世1』 宇都宮…栃木県
- 栃木県史編さん委員会 (一九八四) 『栃木県史 通史編3(中世)』 宇都宮…栃木県
- 栃木県歴史人物事典編纂委員会 (一九九五) 『栃木県歴史人物事典』 宇都宮…下野新聞社
- 日光山史編纂室 (一九六七) 『日光山輪王寺史』 栃木日光…日光山輪王寺門跡教化部
- 日光市史編さん委員会 (一九七九) 『日光市史 上巻(考古・古代・中世)』 栃木日光…日光市
- 野中哲照 (二〇一一) 『中世の黎明と(後)三年トラウマ』 『軍記と語り物』 47号
- 野中哲照 (二〇一三) 『後三年記』 序文の偽書性』 『鹿児島国際大学国際文化学部論集』 13巻4号
- 野中哲照 (二〇一四) 『後三年記』 貞和本と承安本の関係』 『後三年記の成立』 東京…汲古書院
- 野中哲照 (二〇一五) 『解説』 『後三年記詳注』 東京…汲古書院
- 平林盛得・小池一行編 (二〇〇八) 『五十首引僧綱補任僧歴綜覧 増訂版』 東京…笠間書院 ※源恵の記述あり
- 古谷 稔 (一九七七) 『後三年合戦絵詞』 の詞書筆者と書風』 日本絵巻大成15 『後三年合戦絵詞』 東京…中央公論社
- 宮 次男 (一九六七) 『後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題 上・下』 『美術研究』 251号、254号
- 宮 次男 (一九七七) 『後三年合戦絵詞』 について』 日本絵巻大成15 『後三年合戦絵詞』 東京…中央公論社
- 山本泰一 (一九八八) 『破来頓等絵詞』 について——時宗の教義の絵画化——』 『金沢叢書第十五輯』 名古屋…徳川黎明会
- 立正大学日蓮教学研究部 (二〇〇三) 『日蓮聖人遺文辞典 教学編』 山梨身延…久遠寺
- 笠 栄治 (一九六八) 『後三年記の研究 上』 『長崎大学教養部紀要人文科学』 9号
- 笠 栄治 (一九七二) 『後三年合戦絵詞』 とその伝承』 『語文研究』 31、32号

# 使用テキスト

- 本朝文粹…大曾根章介 (一九九二) 新日本古典文学大系『本朝文粹』 東京…岩波書店
- 半井本保元物語…栃木孝惟ほか (一九九二) 新日本古典文学大系『保元物語』 平治物語 承久記』 東京…岩波書店
- 覚一本平家物語…梶原正昭・山下宏明 (一九九一) 新日本古典文学大系『平家物語』 東京…岩波書店
- 延慶本平家物語…北原保雄 (一九九〇) 『延慶本平家物語 本文篇』 東京…勉誠社
- 吾妻鏡…貴志正造 (一九七六—七) 『全訳吾妻鏡 1—5』 東京…新人物

往来社

沙石集：渡辺綱也（一九六六）日本古典文学大系「沙石集」東京…岩波書店

太平記：長谷川端（一九九四～八）新編日本古典文学全集「太平記」1

4 東京…小学館

聖愚問答抄：「昭和重修 日進聖人遺文全集 上巻」京都…平楽寺書店

一九三四版

富木殿御書：「昭和重修 日進聖人遺文全集 下巻」京都…平楽寺書店

一九三四版

三大秘法纂承の事：「昭和重修 日進聖人遺文全集 下巻」京都…平楽寺書店

一九三四版

本願寺聖人親鸞伝絵：「続群書類従 第九輯 上」東京…続群書類従完成会

一九七七版

## 前稿のおわびと訂正

前稿「後三年記」序文の偽書性（「鹿児島国際大学国際文化学部論集」13巻4号、二〇一三年三月）において、東京国立博物館蔵「後三年合戦絵詞」ならびに藤田美術館蔵「玄奘三蔵絵」の画像を掲載させていただいた（中央公論社版の日本絵巻大成、続日本絵巻大成からの三次利用）。いずれも本文中においてはそれぞれ「東京国立博物館蔵」「藤田美術館蔵」であることを明記しているが、掲載画像の直下にも所蔵館を表示しておくべきであった。お詫びして訂正させていただきたい。